

名和 靖

「駆虫之碑」碑文

夫昆虫ニ害ト益トアリ、国家ノ経済ニ関スルコト頗ル大ナリ、益虫助クベク害虫除カサルベカラス、昆虫ノ研究豈忽ニスベケンヤ、名和靖氏奮然斯道ニ従ヒ奏功顕著ナルニ及ヒ、世人亦漸ク駆虫ニ努ムルニ至ル、想フニ此事殺生ニ属スト雖、益虫ヲ助ケ害虫ヲ除クハ是固ヨリ大悲ノ行ナリ、然ハ則チ駆虫ノ靈タルモノ亦以テ瞑スベシ、茲ニ有志相謀リ碑ヲ建テ其靈ヲ弔フ
明治四五年四月建之

(読点筆者挿入)

(裏面発起者)岐阜県下真宗本派同志会・岐阜仏教青年会・

岐阜仏教婦人会・大谷派婦人法話会岐阜支部



「駆虫之碑」明治45年建立 本願寺岐阜別院地内

報道にみる名和靖

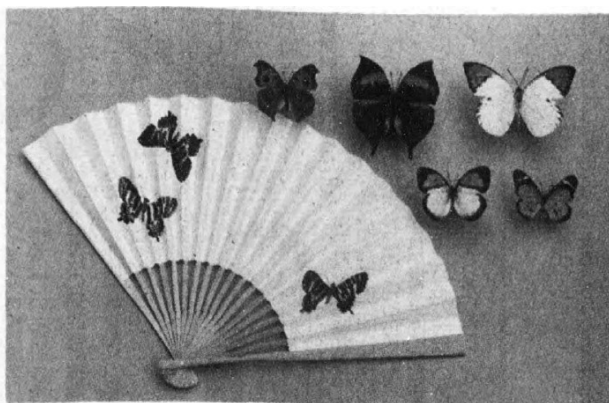
岐阜新聞の記事をみると、名和靖の事績が特集されているものや、著書に関するものがあるが、名和工芸部の蝶蛾鱗粉転写に関する記事(一九四四年一月二三日付)をみてみよう。

見出しには「明治末期発行の『婦人画報』2冊 御嵩町で見つかる」と明治四二年の七月・八月号の二冊が見つかったことを報じている。そこには「名和靖がりん粉を転写 皇后お気に入り、ギフチョウ洋傘」の小見出しがあり、八月号巻末の記事に、「皇后陛下御用の洋傘」「蝶の鱗粉の転写(転写)は其(その)方法發(発)明家なる岐阜名和昆虫研究所長名和靖氏に依(よ)りて製したるものなり」とし、チョウの色、形は実物と寸分変わらない出来栄えとほめている。転写にはギフチョウのほか、カバマダラ、メスシロキチョウ、ツマベニチョウなどいずれも台湾産の五種類を使っているが、ギフチョウについては「他地方には殆(ほとんど)ど見ることなく同懸(県)養老瀧(滝)附(付)近にて名和氏が先年発見したるものにて僅かに一羽の價(価)すら百圓(円)以上の高價なるものなりといふ」とその価値を強調している。この記事は、靖が創刊した「昆虫世界」の一冊に転載されていたが、原本は見つかっていなかった。



明治末に発行された婦人雑誌「婦人画報」二冊が可児郡御嵩町の旧家で見つかった。着飾った当時の令嬢

明治末期発行の 「婦人画報」2冊 町で見つかる



名和秀雄さんがつくったギフチヨウをりん粉転写した扇と靖さんが贈った洋傘に使われた台湾産チヨウ（標本）

女学生の姿ほうふつ

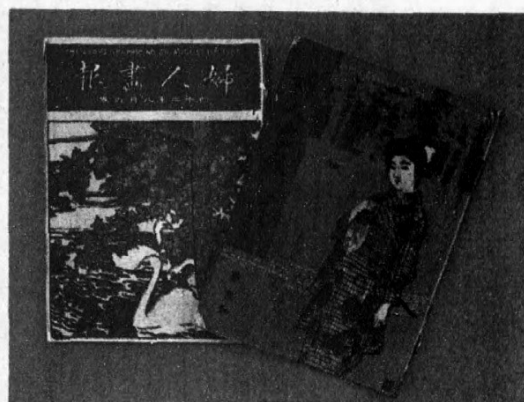
風俗のばす ビジュアルな編集
数多くの写真

うぶつさせている。名和昆虫研究所創立者の名和靖氏（一八五七—一九二六）がギフチヨウなどのりん粉を転写して作った洋傘が、皇后に買い上げられたという記事も見られるなど、興味深い内容となっている。発見されたのは「婦人画報」明治四十二年七月、八月号。どちらもB5判サイズで写真、挿絵のほか約八十ページの本文が付いている。同町の郷土史家平田録郎さん

名和靖氏がりん粉を転写

皇后お気に入り
のギフチヨウ洋傘も

（左）が資料調査中にほぼ完全な状態で見つかった。「婦人画報」は同三十八年創刊。写真を多く入れたビジュアルな編集で当時の女学生に愛読された。写真部分には「北白宮武子女王殿下」「令嬢鑑」「前田子爵令妹静子嬢と秀子写真も。



明治女学生の心と姿をほうふつさせる明治42年発行の「婦人画報」。8月号（右）にはギフチヨウの記事もある

名和昆虫研究所長名和靖氏に依りて製したるものなり」とし、チヨウの色、形は実物と十分変わらない出来栄とほめていた。転写にはギフチヨウのほか、カバマダラ、メスシロキチヨウ、ツマニチヨウなどいずれも台湾産の五種類を使っているが、ギフチヨウについては「他地方には殆ど（ほとんど）見ることがなく同縣（県）養老龍（滝）附（付）近に名和氏が先年発見したものに僅かに一羽の價（価）すら百圓（円）以上の高價なるものなり」とその価値を強調している。同研究所長の名和秀雄さん（左）の話では台湾産のチヨウは、靖氏が台湾の特産品としてチヨウのりん粉転写の技術指導を行っていた縁で現地から贈られたものらしい。「ごく最近まで台湾には産葉が乏しかった。そこで初代がチヨウを使った特産品作りを勧めた。きつと感謝された」と思いまねという。この記事は靖氏が創刊、昭和二十三年まで刊行された月刊誌「昆虫世界」の一冊に転載されているものの、原本は見つかっていないかった。平田さんは「この旧家にはほかにも明治中期から末期にかけての雑誌があるが、今は空き家になっているため傷みが心配。持ち主に働きかけ、研究資料にするよう適切な保管場所を確保したい」と話している。

名和 靖

名和靖

応用昆虫学普及への道

毎年、春先になると岐阜ではギフチョウの羽化がテレビや新聞で報道され、春の訪れを感じてはくれます。昨年十月、岐阜県の偉人

の一人に選ばれた名和昆虫研究所（岐阜市）の創設者、名和靖（安政四・大正十五年）はギフチョウの発見者として知られています。けれども、それは彼の昆虫研究のほんの一端でした。名和靖が生涯で最も多くの時間を費やしたのは、農業生産の向上・農業生活者の生活の安定を目指した応用昆虫学の普及でなかったでしょう。

本巣郡南町重里で、庄

場日記や観察記録が載っています。卒業後も靖は、農学校に助手として残り、害虫駆除・益虫保護を研究・実践する応用昆虫学を学んでいます。助手時代の靖は、

中芳男、眞作佳吉、石川千代松と出会いました。当時の昆虫学界は東京帝国大学の佐々木忠次郎博士や岐阜農学校の松村松年博士らが次々と新しい学説を発表していました。靖は彼らの研究を吸収しながら、岐阜という一地方で応用昆虫学の研究を続けました。また、一般には、積極的な害虫駆除は行われていなかった。害虫の大発生は天狗（てんぐ）の仕業だと思われていたり、村の害虫駆除費の中に、出雲大社へお札を受け取りに行くための旅費が含まれていることも珍しくない時代でした。

（岐阜近代史研究委員・亀嶋聖子）



青年時代の名和靖

1992年(平成4年)1月4日 岐阜新聞掲載

岐阜常師範学校に勤めながら、昆虫研究を進めてきた名和靖は、次第にその両方を行うことが困難となり、一八九六(明治二十九年)に教員の職を辞した。そして、岐阜市京町に名和昆虫研究所を設立し、農産物害虫駆除の研究に没頭していくこととなった。研究所設立の目的は「害虫防除、益虫の保護方法を講究して、斯界（しかい）発展に資し、ひいては重要作物の増殖をもつて国家経済に寄与すること」であった。

農業における害虫駆除の公的な機関が充実していなかった明治期において、靖の研究は大きな役割を果たすことになった。

名和 靖 下

研究所における仕事は、一般昆虫の研究のほかに、講習会や展覧会の開催、害虫駆除の研究や実施、雑誌

「昆虫世界」の発行や書籍の著述などであった。研究所を開設した翌年には、日本国内にウンカが大発生し、イネの被害額は当時の金額で七千五百万円に及んだ。当時、ウンカの研究を進める研究所は名和昆虫研究所のほかになく、靖は、県内はもとより、滋賀県をはじめとした西日本七府県を訪れ、その対策の指導に当たって、被害の拡大を食い止めた。

靖は、害虫駆除講習会開催にも尽力した。一八九八(明治三十一)年から始まった「岐阜県害虫駆除講習会」では、県の委嘱を受け、八年間にわたって講師を務めた。

第一回の講習会は、岐阜県農会内で開かれ、県内各郡より二人ずつが参加した。十四日間にわたる講習

会の中で、毎日六時間にわたって一般昆虫学や害虫駆除法、益虫保護法、野外実習などの講習が行われた。開会式の祝辞では、県会議員の井上貞一が「思ふに爾今へじこん」以後、農事の改良害虫の駆除と相俟（あいま）つて県下

の農業愈（いよいよ）発展するを得ん」と、講習会に対する期待を述べている。受講生は、県内各地区において害虫駆除の実施や啓発活動に従事した。害虫駆除講習会における靖の講話数は千回を超え、聴衆者数は三十万人にも及んだ。

一九一〇(明治四十三)年には、鉄道院からシロアリ予防法の研究を依頼され、自身を「シロアリ翁」と呼んで研究に努めた。そして、鉄道の枕木をはじめ多くの木造建築物をその被害から救った。奈良の唐招提寺もその一つである。

靖の昆虫研究に打ち込む精神は、その後も、子孫によつて引き継がれ、現在に至っている。

（濃飛の歴史を語る会・國枝孝治）

害虫駆除研究の先駆け



会の中で、毎日六時間にわたって一般昆虫学や害虫駆除法、益虫保護法、野外実習などの講習が行われた。開会式の祝辞では、県会議員の井上貞一が「思ふに爾今へじこん」以後、農事の改良害虫の駆除と相俟（あいま）つて県下

2008年(平成20年)2月5日 岐阜新聞掲載

西暦	和暦	年齢	ことごと
一八五七	安政四	〇	一〇月八日、美濃国本巣郡舟木村大字重里（現瑞穂市）に生まれる。 四月、岐阜県農学校入学。 岐阜県農学校を卒業し、助手として勤務する。 郡上郡祖師野（現下呂市金山町）でギフチョウを採集する。岐阜県華陽学校助教諭試験の職に就く。 十一月より翌年四月まで東京帝国大学理科大学で動物学を研修。旧制中学校、尋常小学校で教鞭をとる。 尋常師範学校及び中学校助教心得となる。 一〇月二八日、濃尾地震が発生。収集してきた標本が損壊する。 岐阜県尋常師範学校助教諭となる。 二月に岐阜県尋常師範学校教諭となるが、四月に退職し、岐阜市京町に私立名和昆虫研究所を設立する。 日本全国にウンカが大発生して各地が凶作となる。岐阜県下で害虫駆除の指導を行う。 全国害虫駆除講習会を開催※（以後、一九二三年まで三六回開催する）。雑誌『昆虫世界』を発刊する。 ※「明治以降物故昆虫学関係者経歴資料集」では明治二三年より開催とする。 五月、藍綬褒章受章。 名和昆虫研究所を岐阜公園内へ移設する。 大阪毎日新聞社が募集した寄付金で耐火煉瓦造標本室（記念昆虫館）が竣工。 私立の名和昆虫研究所から財団法人となる。 本願寺岐阜別院（浄土真宗本願寺派）の敷地内に「駆虫之碑」が岐阜県下真宗本派同志会らによって建立される。 全国で白蟻調査と駆除の指導を行う。靖の還暦記念に「昆虫碑」を建てる。
一八七八	明治一一	一一	
一八八二	明治一五	二五	
一八八三	明治一六	二六	
一八八六	明治一九	二九	
一八八八	明治二一	三一	
一八九一	明治二四	三四	
一八九三	明治二六	三六	
一八九六	明治二九	三九	
一八九七	明治三〇	四〇	
一九〇一	明治三四	四四	
一九〇四	明治三七	四七	
一九〇七	明治四〇	五〇	
一九一一	明治四四	五四	
一九一二	明治四五	五五	
一九一七	大正六	六〇	

西暦	和暦	年齢	ことば
一九一八	大正七	六一	関市の篤志家よりの寄付で名和昆虫博物館が建設され、開館する。 「白蟻翁」と称すようになる。大分・山口へ出張の帰途倒れる。 藍綬褒章飾版下賜 八月三〇日、死去。
一九二二	大正一一	六五	
一九二三	大正一二	六六	
一九二六	大正一五	六八	

参考文献

内務省地方局編纂「地方経営小鑑」二〇九、内務省、一九一〇（明治四三）年

名和靖編著『昆虫翁白話』名和昆虫工藝部、一九二四（大正一三）年

岐阜県教育会編『濃飛偉人伝』岐阜県教育会、一九三三（昭和八）年

木村小舟『昆虫翁・名和靖』童話春秋社、一九五四（昭和二九）年

長谷川仁「明治以降物故昆虫学関係者経歴資料集 日本の昆虫学を育てた人々」

『昆虫35（3号補遺）』東京昆虫学会、一九六七（昭和四二）年

小島清「編」『昆虫の研究に生涯を捧げた人 名和靖』『郷土にかがやくひとびと』岐阜県青少年育成県民会議、一九六八（昭和四三）年

片岡剛毅、岐阜県歴史教育研究会編「昆虫研究の名和靖」『濃飛人物史』濃飛人物史刊行会、一九八〇（昭和五五）年

保科英人「名和昆虫研究所側面史」『きべりはむし』第三九巻第二号、きべりはむし編集委員会、二〇二七（平成二九）年

官報、一九二三（大正一二）年一月一八日、大蔵省